# 物部神社鎮魂祭・大元神楽に見る呪術的古層

福岡ユタカ

**研究概要**

古代、特に音、或は芸能等を探る上において資料は少なく文献に残る歌や演奏も実際どのように歌われ演奏されていたかを探るのは非常に困難である。現代の楽譜にあたる物はほぼ無く、ましてや録音物などはもちろん無い。

これらを探る上で今に残る芸能、神事等からその古層を探るという事に主眼を置き調査を行った。

音楽家として以前から茫漠とはしているが次のような印象を持っていた。

『中央の音楽は洗練され品が良くどちらかというと静的で、周辺（地方）はその逆で動的だ。』

少し思い起こしてみれば分る事であるが、宮中や大な社で行われる雅楽などは非常に厳かで静的で、一方地域の山村などで行われる祭り（神楽、田楽等）は活力に溢れ動的だ。

都市（中央）の芸能でも動的なものはあるがそれは民衆中心である事が多いようだ。

また同じ系統の芸能と思われるものも時を経て中央に根づいたものなどは何故か静的に変化しているようにも思える。

もちろん例外はあると思われるが、大まかにはこのような印象をもっていた。

今回の調査で数は少ないものの様々な芸能・音・音楽を見聞きしたのだがその印象は変わらなかった。

まとめると次のような対比である。

動　－　静

リズミカル（ノリがある）—平坦なリズム（ノリは排される）

周辺（地方、山、海）—京（中央、大きな社等）

民衆－権力

魂フリから魂シズメ。呪術から神道へ。

神道においていわれる「ケガレ」とは上代では「穢れ」では無く気が枯れた状態を示し、魂（タマ）、生命力の低下を示す。

魂フリとは気（ケ）の枯れた魂（タマ）に霊力のある呪物を振り活力を与え再生させる呪術である。

魂シズメは　遊離した，また遊離しようとする魂を鎮め肉体につなぎ止める。

鎮魂祭は「みたましずめ」と呼ばれているが平安朝の古代では「ミタマフリ」と呼ばれておりこの儀礼は元来魂フリの呪術であった。

つまり上古において魂振りは魂鎮めに先行する概念であり、後に魂鎮めの概念が入って来た。これは呪術から神道への変化も促した。

（日本語に探る古代信仰：土橋寛）

鎮魂の概念については折口信夫以降諸説あるが、魂フリが魂シズメに対して先行する概念であったとの説には私もまだ直感的な印象からは出ていないが概ね同意する。

そしてその変化は古代において山や磐や木或は祖霊神などが信仰の対象とされてきたものが国体の統合が進むにつれ次第に個別の神（アマテラス、オオクニスシ等）を信仰するようになったものとパラレルなようにも思える。

これは上記に話した動的なるものと静なるものの対比と何か関係があるのかも知れない。

古代各地域で行われていたであろう名も無き神、祖霊神、地神に対しての祭祀（神がかり・託宣）、これは魂フリ的要素が強かったと思われ、動的なものであったろう。

国が統合されるにつれ神・神話も統合され中央では魂フリ的なものは次第に遠ざけられ魂鎮め的なものが優先され、巫女舞等も形式的なものに成って行ったのだろう。　いささか乱暴で粗雑な展開かも知れないが音楽家としての直感として大まかにはそのように理解している。

今回の研究で最初に訪れたのが私の故郷でもある島根県（主に石見）であったが偶然にも上記の概念（呪術、魂フリ）に近接したのものだったは幸いだった。

物部神社の「鎮魂祭」はそのものであるし、大元神楽は由来は中世とも云われているが呪術的な神がかりの古儀を残し、解釈によっては魂フリ的な儀法も多々見らるのである。中世、近世の中にも，或は今に至るまで古代的なるものは存在している思われる。

そして両者は地理的にとても近いのである。

物部神社鎮魂祭そして大元神楽を通しこれらを考察してみたい。

## 物部神社「鎮魂祭」総論

神社の由来、鎮魂祭の進行、及び中田宮司インタビューは別紙資料。

鎮魂祭は前で述べたように魂フリと魂鎮めを行うこの社の特殊神事で古くは１１月の寅の日に行われ、冬、日のエネルギーが最も弱った時期に魂の活力を高める為に行われる。

この神事は宮中と物部系神社（石上神宮、物部神社、彌彦神社）で行われているもので物部神社の鎮魂祭は最も宮中に近いとされているそうだ。物部流の鎮魂が宮中に入ったのではともいわれている。（中田宮司）

神事の中枢部分は神殿の上段と下段に分かれ行われる。

○上段―これは物部流の鎮魂法といわれる。

柳箱が置かれ中に紙製の人形（ヒトガタ）（当日の祭典までに作る）が二体入っている。それは「氏子一同」と「崇敬者一同」とされている。

上段の神官と下段の巫女が呼応するように数を唱える。

一「ひとー」二「ふたー」三「みー」四「よー」五「いつー」

六「むゆー」七「ななー」八「やー」九「ここのー」十「たりー」

この数は物部のレガリア「十種神宝（とくさのかんだから）」に符号している。

・魂フリ

数を数える毎に権禰宜は人形の入った柳箱を右回りに三回半まわし振る。

ちなみに宮中の鎮魂祭では「魂振りの儀」として天皇の衣が振られる。

・魂結び、魂シズメ

数を数える毎に玉の緒を結ぶ。これは遊離し、抜かれてしまった魂を身体に結びつけ鎮めるという事である。これは民間習俗に由来していると言われている。

○下段―天鈿女命(アメノウズメ)流の鎮魂法といわれる。

猿女に扮した巫女の童女（中田宮司の娘さん）が上段の神官に呼応し自らが乗っている宇気槽をドンと撞き、多草をサラサラと振る。

宮中では「宇気槽の儀」として同様の事が行われている。

この儀式はほぼ真黒の闇、無音の中で行われる。奏楽は全くない。

宮司と巫女の「ひと～」の声そして笏（しゃく）の甲高い音、鉾で宇気槽を鋭く撞く音、多草の音だけが暗闇の中に流れる。くり返されること１０回、シンプルで呪術的な空間だ。

普通の状況だと聞こえづらい巫女振る多草（クマ笹）のサラサラという音も実に耳に心地よく、何かを祓い静謐な空間を作り出すように感じられる。

多草の音は原始的な鈴の音であろうか、以前同じく物部の磐船神社（大阪府交野）で御祈祷をしていただいた時に頭の廻りを鈴音で満たしていただいたのを思い出す。物部の魂フリは鈴がとても重要であるようだ。

上段で行われる物部流の鎮魂法は真暗で全く見えずさらに秘儀的だ。この特殊神事は且つては一般の参列は禁じられ神職だけで行われていたそうだ。

静的で神秘的、呪術的な時空で「式の途中、意識の飛んでしまう方もまれにいらっしゃいます」とは中田宮司の言である。

しかしこの神事において特別「神がかり」などのトランス状態は示唆されてはいないようだ。

式の前段で「十種神宝祓詞」が奉上されるが、これは死者さえ蘇るという文字通り呪術的な魂フリの詞であり、この式が元来動的なものであり、時を経て多分に様式化され静謐な儀式にったと想像はできるかも知れない。しかし果たしてどうなのであろう…

神がかり（トランス）状態はよく動的なリズム、舞によってなされる事が多いがこうした静的、神秘的なトランスも考える必要があるかも知れない。

また上、下段のペアで唱和される数の唱和も多分に様式化されているがこれは「神がからせる司霊者(宮司)」と「神がかる巫女」のペアと取れるかも知れない。

この神事が何時頃始まりどのように継承されて来たかは残念ながら調査が及ばず不明だ、今後の課題としたい。

大元神楽との関係

神楽は神話上、岩戸神話におけるアメノウズメの神がかりを起源とするものとされる鎮魂の儀でありそれはこの神事の中枢でも行われている。

そして今現在神がかりが行われている大元神楽（後述）とは距離的に近くこれら二つの関係をインタビュー含め探っては見たのだが、残念ながらその（神事的な）繋がりは見い出せなかった。ただ物部神社の神官が近隣の大元神楽に奉仕していた事はあるそうだ。

対して大元神楽（市山神友会）の皆さんも物部神社の鎮魂祭については以外なほど知らなかった。

物部神社は石見国の一宮でありこの地の中心の大社であるのに対して大元信仰は民衆の信仰である。

大元神楽の始まりは中世、荘園制度の「名」とという単位で始まったと考えられるが、物部神社のような大社はそれとはまったく別の経路を辿っていったみたいだ。

両者とも今現在、鎮魂の古儀を残してはいるがそれをもって一足飛びに古代の考察とはいかず、間に中世～近世の数多くの変革を経て来た。特に物部神社のある地域は石見銀山も近く多くの動乱にも巻き込まれて来たようだ。

さらに今回の研究調査で分った事だがこの地域に限らず古の地域の交流は意外に少ないということだ。隣りの地域の祭にはほとんど行っておらず、お互いにどのような形式かも知らなかったということが多い。

両者は各々の歴史を刻んで来たのであろう。

しかし音楽、楽奏という観点で見るとこの地域の共通の広がりは散見される。

ここ物部神社で行われていた楽奏は中田宮司によると神楽とはまったく違うとの事であるがそのメロディー、リズムは大元神楽と非常によく似ている。これは音楽の広がりの面白いところで時を経て長い年月が経つとその地域の音、メロディー、お囃子はとても似たようなものになるようだ。

参考文献

島根県物部神社の古伝祭；古典と民俗学の会　(1983)
邑智郡　大元神楽：　邑智郡大元神楽保存会／編集（1982）

## 石見国一宮　物部神社

（物部神社ホームページ　http://www.mononobe-jinja.jp/　より抜粋）

○御由緒

御祭神宇摩志麻遅命は、物部氏の御祖神として知られております。御祭神の父神である饒速日命は十種神宝を奉じ、天磐舟に乗って大和国哮峯に天降り、御炊屋姫命を娶られ御祭神を生まれました。御祭神は父神の遺業を継いで国土開拓に尽くされました。

神武天皇御東遷のとき、忠誠を尽くされましたので天皇より神剣師霊剣を賜りました。また、神武天皇御即位のとき、御祭神は五十串を樹て、師霊剣・十種神宝を奉斎して天皇のために鎮魂宝寿を祈願されました。（鎮魂祭の起源）

その後、御祭神は天香具山命と共に物部の兵を卒いて尾張・美濃・越国を平定され、天香具山命は新潟県の弥彦神社に鎮座されました。御祭神はさらに播磨・丹波を経て石見国に入り、都留夫・忍原・於爾・曽保里の兇賊を平定し、厳瓮を据え、天神を奉斎され（一瓶社の起源）、安の国（安濃郡名の起源）とされました。

次いで、御祭神は鶴に乗り鶴降山に降りられ国見をして、八百山が大和の天香具山ににていることか

ら、この八百山の麓に宮居を築かれました。(折居田の起源)

○御祭神

主祭神　宇摩志麻遅命（うましまじのみこと）

相殿神

右座　饒速日命（にぎはやひのみこと）　布都霊神（ふつのみたまのかみ）

左座　天御中主大神（あめのみなかぬしのおおかみ）天照大神

○社殿創建

最初は神体山である八百山を崇めていました。 後に、天皇の勅命により継体天皇八年（513年）社殿を創建し、その後、石見銀山争奪の兵火などで三度消失しました。

宝暦三年（1753年）再建され、文政元年（1818年）の修理を経て、安政三年（1856年）宝暦時の規模で改修され現在に至っています。(現在、県指定文化財）春日造では全国一の規模です。

○鎮魂祭（みたましずめのみまつり）

鎮魂というと一般的に霊を弔うための言葉と解釈されていますが、本来はその逆で活力を与える・復活を促す・甦る・悪影響をもたらすものを払拭するなど総ての好転的な意味を持つものです。また神道行事の根幹を為す"祓いの本義"であるとおもわれます。

元来存在するもの総てに生命が存在すると考えられています。存在そのものが生命といって過言ではないでしょう。そのものが存在し続ける上で最も必要なものが魂魄です。この魂魄を振り動かし、結びつけ、鎮め置く、そのものの存在を本来の姿に立ち戻らせる祈祷法こそ、「鎮魂」本来のあり方なのです。その狭義の一部分に霊を弔うことも含まれてはいるが大儀はあくまでも存在を存在たらしめることであり、より大きな存在へ導くものです。

この鎮魂祈祷を初めて斎行したのが御祭神宇摩志麻遅命です。このことについては江戸期まで古事記・日本書紀と並び称された「先代旧事本紀」に記述されています。それによると「(前略)　蒼生及萬物の病疾のことあらば　神寶を以て御倉板に鎮置て　魂魄鎮祭を為して　瑞寶をふるべ　(中略)　如此祈祷せば死共更に蘇生なんと　おしえたもう　(後略)」とあります。たとえ死んでも鎮魂祭を斎行し、十種神寶を振ることによって蘇生するというのですから、とんでもない祈祷法です。

この鎮魂祭を古くから伝承し斎行しています神社は奈良県石上神宮（物部の鎮魂法）・新潟県弥彦神社（中臣の鎮魂法）・島根県物部神社（物部・猿女の鎮魂法）の三社です。特に物部神社の鎮魂祭は宮中において斎行される鎮魂祭に最も近いものです。

また物部神社が祈祷専門の神社として天皇の勅命により社殿が建てられ、現在も年間百件の祭事を斎行し続けております根幹は、蒼生（人間）や萬物のために鎮魂祈祷をなさんが故の御祭神宇摩志麻遅命の御意志の継承でもあります。

物部神社で行われます祈祷の総てにはこの鎮魂祭の本義が存在し、より大きな御神徳が発揚されています。

## 鎮魂祭　参列記録

平成13（2013）年11月24日に島根県大田市川合町にある「物部神社」へ鎮魂祭そして新嘗祭へ初めて参列した。

鎮魂祭は物部神社で行われる特殊神事でかつては一般の参列は無かったようだ。

今回も出雲大社の古伝新嘗祭と同様録音録画は固く禁じられた。

中田宮司による式前の説明によるとこの禁を破ると様々な呪術的な不具合（意識が飛ぶ等）が起る場合もあり、当社はそれに責任は持てないのだと言う、少し緊張する。

おおよその式次第は記したいと思うのだが記録を禁じられた為、自らの記憶、書籍「物部神社の古伝祭：古典と民俗学の会」そして2004年11月24日に古代出雲歴史博物館によって録画された映像（この時は録画は許されたようだ）などを参考に、おおよその式次第を記してみたい。

午後8時頃

・宮司の挨拶の後照明を落とす、本殿内の明かりは提灯のみになりかなり暗くなる。

・太鼓、笛、の楽奏が始まる

　楽者は拝殿の左後方に位置し　笛と大太鼓で演奏される。笛のメロディーは大元（石見）神楽に似ている。しかし手拍子（スリ鉦）小太鼓は無い。

・神職6人（前列に4人、後列に2人）・巫女2人が拝殿に2列になって着座。

・権禰宜拝礼、大祓詞奏上。

・権禰宜修祓（シュウバツ）

・宮司、神殿に上がり警蹕（ケイヒツ）と共に開扉（カイヒ）。

　拝殿の奥上に神殿を配しているのだがかなり高く（3mはあろうか）階段も多い。

・献饌

　神饌の数は多かった。特に必ずお供えしなければならないものは無いと言う。

・宮司祝詞奏上。

　十種神宝祓詞、石上神宮のそれとは多少異なるようだ。

・権禰宜二人昇殿し、御簾（みす）を垂下す。

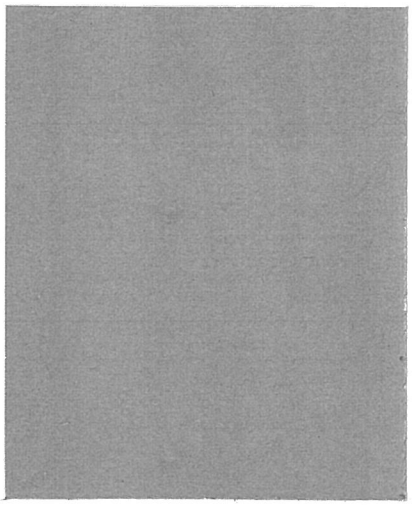
・神殿下（大床）ではコモ（昔はカヤで編んだ）を敷き、その上に宇気槽（直径50cmくらい）が伏せて置かれる。

宇気槽に猿女と称する少女が、右手に鈴と弊のついた鉾を持ち、左手には笹を持ってがり、神前に向く。

猿女には13才以下の少女、ただし月のものがある少女はいけない。この日は中田宮司の娘さんが努めた。

・　宮司が蝋燭を持ち神殿に昇りきったところでさらに消灯、ほぼ真暗、暗闇となる。
　目が慣れてくると猿女はぼんやりと見えるのだが上の神殿では何が行われているのかは分らない。

・　笏（しゃく）の拍子のパーンという高い音が響き「ひとー」と言う声が上の神殿から聞こえる。
　それに呼応するように直後猿女も「ひとー」と唱え、右手の鉾をドンと宇気槽に打ち下ろす。
　そして左手に持った笹を上に上げサラサラと振りながら廻すように降ろす。これを0回くり返す。
　一「ひとー」二「ふたー」三「みー」四「よー」五「いつー」
　六「むゆー」七「ななー」八「やー」九「ここのー」十「たりー」
　この間楽奏は無く暗闇の中、上記の声、音のみが響く、非常に幻想的だ。



この時上部の神殿では柳箱が置かれ中に紙製の人形（ヒトガタ）が二体入っておりその人形にはそれぞれ「氏子一同」「崇敬者一同」という文字が書かれてある。

この柳箱を権禰宜の一人が振るが、その振り方は右回りに三回半まわすという。

もう一人の権禰宜が笏を持ち「ひとー」と数えるが、この時宮司は唱え言を言い、玉の緒（赤･白･緑･黄・紫の五色の絹糸を撚り合わせ　た長さ五十センチほどの紐）と称する紐に一つ結び目を作る。

「ふたー」で二つ目を結ぶ。従って結び目は全部で十個できる。

この時の唱え言は秘伝のため教えられないそうだ。

・本殿に明かりがもどる。
　消灯からここまで楽奏は無し。

・猿女は宇気槽を降り鉾と笹竹を権禰宜に渡し、宇気槽とコモもかたづけられる。
　宮司以下権禰宜二人も上部の神前より降り所定の席につく。

・宮司以下参列者等の玉串奉奠。

・撤饌。楽奏が始まる。（笛と大太鼓が交互に鳴る　静かな楽）

・楽奏のテンポが上がり、神職が昇殿、警蹕と共に閉扉。

・一同二拍手一杯

終了。ほぼ2時間あまり

## 中田宏記宮司インタビュー取材（2013年11月25日　物部神社にて）

私たち研究員は鎮魂祭の明くる日（25日）に新嘗祭にも参列しその後、中田宮司にインタビュー取材を行った。鎮魂祭・新嘗祭と重要な大祭の後で大変お疲れの様子ではあったが快く受諾していただいた。

ここでは概略を記す。

インタビュー骨子

鎮魂祭は静かに行う祭りで以前は一切の参拝者をお断りしていた。

このお祭りは「御霊鎮（ミタマシズメ）のまつり」という。

鎮魂祭は物部神社関係、石上神宮、物部神社、彌彦神社（イヤヒコジンジャ）と宮中でのみで行われている。宮中では新嘗祭、新嘗祭の前日（11月22日）に行なわれている。

彌彦神社（新潟、越後国一宮）は時期は少し違っていて年2回（4月1日、11月1日）行なわれている。

ここ物部神社では11月25日の新嘗祭の前日にご奉仕させていただいている。

新嘗祭は江戸時代は8月に行っていた、本来新嘗祭と鎮魂祭は別物であったと思う。

石上神宮は物部の総氏神を祀る神社でこちら（物部神社）は兄弟のような社で主にご祈祷を行う神社である。

正面の本殿を通しその奥の御祭神、宇摩志麻遅命の御陵をご祈祷する事になっている。

ここ（物部神社）と宮中の鎮魂祭は非常に良く似ており、宮中と同じで古い形がそのまま伝わってきている。

これは物部の神事（鎮魂祭）が宮中に入っていったのではなかろうか。

神殿の上段で行っていたのが　物部流の鎮魂法である。

神殿下、大床の下段で行っていたのが天鈿女命(アメノウズメ)流の鎮魂法である。

・上段ー物部流の鎮魂法

これは「魂振り」であり、凝り固まり引き籠っている状況のものを揺り動かし活性化し元気な状態に持って行くものである。

そして「魂結び」は遊離し、抜かれてしまったものを身体に結びつけ鎮める。そのまま遊離、離れて行くと魂が抜けた状態になり、悪気が入りやすい状態になってしまう。

ちなみに石上神宮の鎮魂祭は魂をほぐす（凝り固まったものを解放し活性化する）とされ物部神社の鎮魂祭は魂を結ぶとされる。

・下段（神殿下：大床）―天鈿女命(アメノウズメ)流の鎮魂法。

宇気槽を撞く（魂鎮め）　これは魂を活性化しその後鎮める。

国魂（国全体の魂）も鎮める。　人と国全体の魂を活性化（魂振り）しその後鎮める。鎮めない

と地震等災いが起こる。

宇気槽は大地と同じであろう、相撲の四股（シコ）などと同じで大地に鎮める。

天鈿女命の衣裳、採物は岩戸神話から来ている。

頭に天の真拆葛（まさきかずら）…古事記

襷（たすき）に天の香山の日蔭鬘（ひかげかずら）…古事記

右手ー千草を巻いた矛…日本書紀

左手ー天の香山の笹の葉を束ねて手に持つ…古事記

○十種神宝祓詞（とくさのかんだからはらえことば）

この祝詞は十種神宝を

「一二三四五六七八九十、布留部由良由良止布留部」

（ひと ふた み よ いつ む なな や ここの たり、ふるべ ゆらゆらと ふるべ）

という特殊な言葉で振ることにより死んだ人も生き返るという呪法である。

「一 ～ 十」は物部氏のレガリア「十種神宝（とくさのかんだから）」に符合する。

十種神宝は石上神宮に祀られており各々は次のようなものである。

・羸都鏡（おきつかがみ）—多く（遠く）のものを写し出す鏡。

・邊都鏡（へつかがみ）—近くのものを映し出す鏡。

・八握劔（やつかのつるぎ）—内なる邪を断つ剣。

・生玉（いくたま）—生命力の玉、活性化。

・足玉（たるたま）—形体の充足する玉。

・死反玉（まかるがえしのたま）—亡くなった方を生き返らせる。

・道反玉（みちがえしのたま）—間違った方向へ行ったものを正しい方向へもどす。浮かれたものをもどす玉。

・蛇比禮（おろちのひれ）蛇のヒレとも云う。—這ってくる蛇の害を除くヒレ。

・蜂比禮（はちのひれ）飛んでくる虫の害を除くヒレ。

・品物比禮（くさぐさのもののひれ）すべてのものの邪を払うヒレ。

○鎮魂祭の楽奏

鎮魂祭のときの奏楽は独特なものであり神楽とは別のものである。

しかし古くから物部神社に伝わってきた奏楽かどうかは分らない。

少し奥の方へ入ったところの社は神楽の影響が出て来きている印象がある。

このあたりの石見神楽は川合神楽で六調子（大元神楽系）である。

○大元神楽との関係

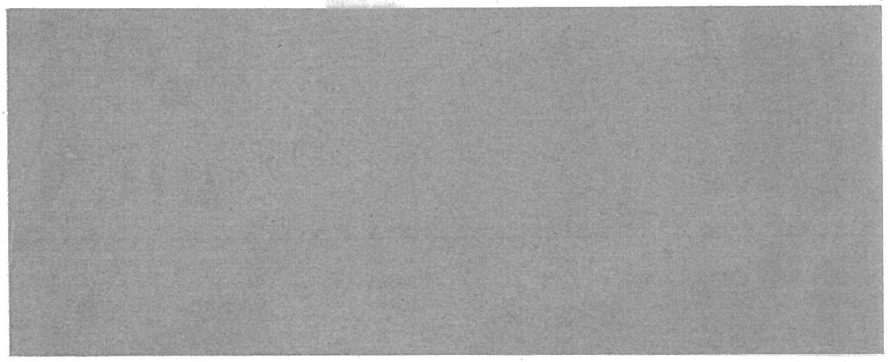
岩戸神話での天鈿女命の舞は神楽の始まりでもあるし神がかりのはじめでもある。

神がかりで有名な大元神楽は邑智郡で近い場所にはあるが祭儀的なものの関係はない、しかしここにいた神主が大元神楽に御奉仕していた事もある。古くの社の歴史をみると山側の方に大元社はある。大元神は民衆の信仰だ。

■石見神楽

私が生まれた島根県西部、石見地方に伝わる里神楽に石見神楽というものがある。この地域は神楽の里とも言われ今でも盛んに行われておりその団体は優に100を越える。神楽を行う人々を我々は舞子と呼んでいるが、人口（約20万人）比率で考えると数十人に一人は舞子だと言える。そしてその範囲は広島県北西部にも及び団体数はさらに増える。

我々石見人はお祭りというと御神輿ではなくまず神楽を思い浮かべるのである。



石見地方の神楽団体

・浜田市　人口58,717人（51団体）

浜田市石見神楽公式サイト団体リスト

http://iwamikagura.jp/modules/iwa_hitobito/content0002.html

・益田市　人口47,782人（15団体）益田市観光協会

http://masudashi.sub.jp/kagura_top/

・江津市　人口24,173人（17団体）江津市観光協会

http://gotsu-kanko.jp/iwamikagura/kaguradan/

・大田市　人口35,503人（10団体）大田市観光サイト　石見神楽

http://www.ginzan-wm.jp/iwami-kagura

・邑智郡　人口19,450人（27団体）

邑智郡神楽情報　社中紹介

http://www.town.shimane-misato.lg.jp/files/20130327113122.pdf

・鹿足郡　人口13,984人　（12団体）

吉賀町　5　津和野町　7

参考

島根県西部公式観光サイト「なつかしの国石見」神楽団鯛紹介

http://www.all-iwami.com/contents/kagura/syatyuu/

■大元神楽　概略

大元神楽は石見神楽のルーツとなる神楽と言われており主に石見地方の山間部（邑智郡、とそれに隣接する地域）で行われている。

ゆったりとした六調子と云われる舞がまだ残されており、何より呪術的な神がかりが古儀に則り今でも行われている。

神楽の語源は神座（かみくら）といわれ、それは神を勧請する座といわれる。神楽はその神座に於いて神を迎え神人一体の響宴を繰り広げ、神の降臨（神がかり）を仰ぎ、示現（託宣）を聞くことがその目的とされる。

このように神がかり・託宣は神楽において原義とも云えるのであるがそれが現在残されているものは数少ない。大元神楽はそれが残る希少な神楽であり、昭和54年には「国指定重要無形民俗文化財」にも指定された。

(1) 歴史・変遷

その由来は中世に石見地方に広く伝わる民間の大元信仰にあり村の祖霊神、農耕神に捧げる田楽系の行事が原型と思われている。同じく中国地方に広く伝わる荒神信仰との濃密な関係が伺われその伝搬経路も似通ったものであったようだ。

荒神、大元神の名称の違いは中世末から近世にかけての白川家・吉田家という神祇に関わる管轄によって生じたものでこの両神を併せて祀る地区はきわめて少ない。（農耕文化の民俗学的研究　白石昭臣　p412）

大元神と荒神はほぼ同じものであると言ってよいであろう。

荒神は東日本では一般に火の神、竈（かまど）の神として信仰されているが西日本では千葉～宮崎にかけて分布し中心は中国地方、とりわけ岡山県、島根県に数多くそれらは多く御神木に祀られる。

祀る神としては文字通り荒ぶる神が一般的であるが、地域により、土神、祖霊神、水の神、火の神、、と多様である。

中国地方で祀られる大元神･荒神はその多くが祖先神で、中世の農村構造、荘園の名主（みょうしゅ）を中心とした血縁共同体（一族一門）の奉じる神であったといわれる。

祖霊神と共に農耕神の性格が強く大元では「作り神さん」などと呼ばれ親しまれている。

名（みょう）の及ぶ範囲は近世の村組織よりも小さく、数軒ないし数十軒で大元神、御神木もその範囲で祀られる。

御神木は別名「祝木」（いわいぎ）とも呼ばれそこは聖地とされ、かつての名主の墓地の近く、名田（みょうでん）の水源（水口）、小高い丘などに多く見られ現世と他界の境界と見なされる場所に多いようだ。

（神楽源流考　；岩田　勝　P475）

現在は合祀され小祠、神社に祀られるのも多く成ったが、御神木はまだ残っている。

これらの祭式（神楽）を伝えたのは中世後期の修験者（里山伏、法者）だといわれる。各地を遊行し先祖祭祀や呪術的祈祷祭祀を伝えていった山伏、法者は次第にその土地に定着し、時を経て司祭者、神職にもなっていった者もいると考えられ、元は修験者だと家伝に残る神職、神社も見受けられる。

（大元神楽の性格とその変遷：山路興造）

血縁共同体で祀られていた大元神は時を経て近世に至り地縁的共同体の村落祭祀へと変化して行き

次第にその地域の総氏神になっていった。

同時に吉田神道の影響により修験系の仏教的色彩が払拭され、江戸期には国学の影響によりさらに神道色が強められていったと考えられているが今も修験系、呪術色の残る祭式や演目はまだ残されている。

（大元神楽の性格とその変遷：山路興造）

記録文献は少なく歴史的に不明なところも多いが現在残るものとしては次のようなものがある。

・元亀４年（1574年）　阿須那村加茂宮（現羽須美村）で神楽が行われたとの記録がある。

・天正４年（1576年）　中野加茂神社（現石見町）に残る「年中祭祀の規式」に四年に一度の大元神楽の記載がある。

・元和元年（1615年）　吾郷村天津神社（現邑智町）に「大元神楽熟書」が残されている。

その歴史は少なくても中世を下る事はない。

（私の神楽談義Ⅱ，：竹内幸男　平成６年　p66　）

大元神楽はそれまで神職によって舞われてきたが明治の変革（敬神思想）による神職の演舞禁止を受け、神職より氏子に伝えられた。上述のようにこの地方の神楽に対する熱は非常に高く神楽を中断するのは神職も忍びなかったという事である。

以降この地方では神楽の中枢部分（神事部分）を神職が保持し裾野の神楽舞を土地の神楽組が担当し続いている。

また同時期に託宣神事（神がかり）も禁止されたが山間部の二、三の地域では中央の目も届きにくく内密に続けられてきた。何故このような禁止令が出たのか詳しい事は分らないが石見の舞子連中に伝わる話では「天の声を聞くのは天皇だけである」との理由が聞かれる。

(2) 式年祭

式年（神楽年とも言われる）の秋も深まった霜月に一夜（夜明かしとも呼ばれる）をかけて大元神楽は行われる。

記録によると明治末年までのものは演目数も多くとても一夜ではできず数日かけて行われていたことが伺われる。

式年は土地によって異なるが4、5、7、13年（数え年）で一様ではない。（市山地域では７年である）

白石昭臣氏の研究によるとこの式年数は焼き畑のサイクルによるものではないかとあり、稲作中心の地区では式年祭が行われていず、畑作・焼き畑が行われていた地域では式年祭があるという。面白い考察だ。

奉納神楽は毎年行われるがそれは正式には大元神楽とは呼ばれず、式年祭にのみ行われるものを大元神楽という。

(3) 舞座

且つては収穫を終えた耕地に稲架（いなはで）を用いて神殿を新たに儲けて行っていたが今は主だった神社の神楽殿、社殿を舞殿としている。

稾蛇（後述）を安置し、舞殿の東の柱を元山（主祭神）とし西の柱を端山としそれぞれ俵を備え付け、天蓋を吊り、なげしを四方に飾る…これら舞座の準備は全て神楽団が行う。

神にお供えする神饌も式年祭の時は豪勢で40を越える。

(4) 舞とお囃子

舞はゆったりとして古式を残している。腰低く重心を落とし重々しく舞うのが大元舞の特徴で鬼舞などの決め所では股を割りズイと腰を入れる所作がよく見られるが正に地霊を鎮める四股のようだ。

基本はすり足で足の裏は見せてはならないと言われている。「二畳で舞え」とも言われているがこれはかつて民家でも舞われていた名残であろうか。

旋回運動も多く、舞(マイ)は廻る(マワル)から来ていると云われるがまさにそれを表しているようだ。

神楽をする人をここでは舞子と呼ぶ。

お囃子は大胴(大太鼓)をリーダーとし、小太鼓、手拍子(手すり鉦)、笛という構成で、歌もリーダーである大胴の人が担当する。これは石見神楽も同じである。

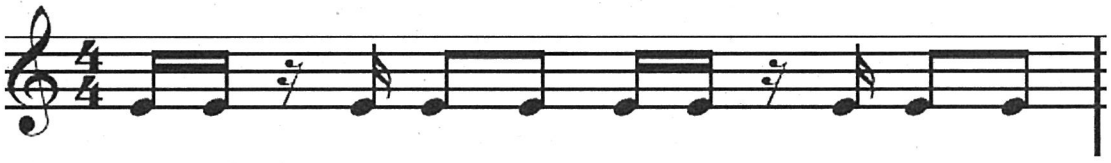
リズムは六調子と言われやはりゆったりとした古式を残したものでこれより発展した石見神楽の八調子の3連系(シャッフル)のノリやオフビート感覚は少なく、より呪術的でシンプルだ。

これはネイティブインディアンや奥三河の花祭り、四国本川神楽等にも良く似ている印象を持った。

ちなみに地元石見ではこの旧来の六調子と明治初頭に変革された新しい八調子のリズムに関しては様々な意見や論争があるのだが、筆者はこの六から八への変化は江戸期に海運を伝って伝播された「はいや節」等南海系のビートが六調子に入り込んだのではと推測している。(詳細は避けるが海系のビートは強弱が強く、快活である)八調子の始まりはやはり海運が盛んだった浜田である。

話を元にもどそう。

大元神楽の囃子(リズム)は数種類あるが託舞等で聞かれる基本リズムは



でシンプルであるが故に大元神楽の中でももっとも呪術的な印象を持つ。

アクセントは1.3拍目にありよりオンビートが強調される。1拍目の16分音符が8分になる場合も多い。

舞の場面が盛り上がるにつれテンポも早くなり、アッチェルする拍頭のアクセントがドン、ドンと舞子を押し上げるように後押しする。これは託舞の時にはさらに強調される。

大元神楽の特徴は何といっても神事部分の中枢の鎮魂の信仰を表した呪術的な神がかりでこれは「託舞(たくまい)」とも呼ばれる。

神がかりが起る本式のものを「本託(ほんたく)」起らない形式的なものを「柴託(しばたく)」或は「寄せ託」とも呼ばれる。

(5) 稾蛇、託綱

稲藁で作った特徴的な「稾蛇」を中心に大元神楽は進行して行く。

稾蛇は託綱(たくづな)とも呼ばれ、新穀の稲藁で総代、神楽の団員、氏子等によって事前に作られる。

長さは七尋半（約 13.5m）と長いがこの時はおおよそ 13 人ほどの人数で 1 日で作られた。近年は稾蛇に加え米俵（元山、端山に備える）も作る人が少なく難しくなって来ているそうだ。（本山氏談）

稾蛇は中国地方の荒神信仰にもよく見られ、それを御神木に奉納する形式も多いがこのように神楽において神がかりに使用される例（備中神楽や比婆荒神神楽等）は少ない。

ちなみに比婆荒神神楽の場合は稾蛇のケバを蛇の鱗と称しそれを神楽式の中で真剣で切り落とす「鱗削り」があるが大元神楽ではケバは作成時にハサミで切り落とされており出来上がったものはすっきりとしている。

蛇は良く知られるように両義性を持つ聖獣である。

蛇―綱　の変化をそれに当てる考察もある。

鱗は龍蛇の異形の象徴でありそれを削ることにより浄化され「御綱」となる。（比婆荒神の中世的像容　―「龍押し」の問答劇をめぐって　山本ひろ子）

大元のそれはすでに龍蛇から託綱になっているのであろうか、或は「鱗削り」は無くなってしまったのであろうか…

この特徴的な稾蛇については起源も含め謎が多いが興味は尽きない。

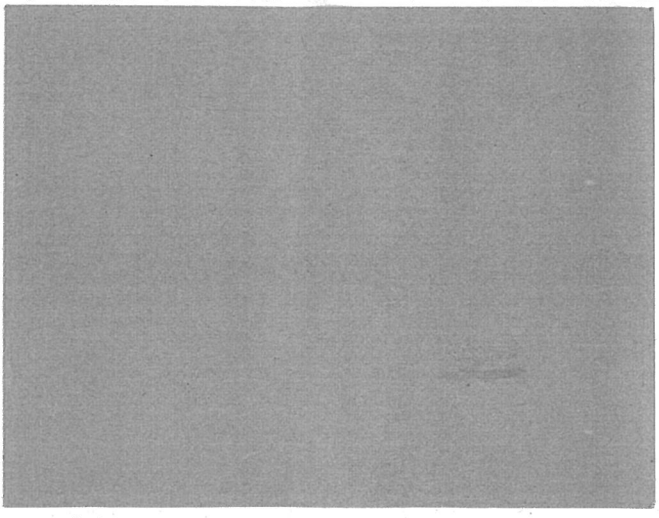
これらの神楽、祭式は修験の民（里修験、法者等）が関わっているとされるが、この稾蛇も彼らが伝えたのであろうか。それともすでにその風習はすでにあり習合していったのであろうか…筆者の浅学もあり不明な点が多いがこれからの課題として注視して行きたい。

作成された稾蛇は式まで神社へ安置しておく。

そして本番当日、式始まりに「神迎え」として大元神の御神木まで行き、神を稾蛇にお迎えし、舞殿までお連れし、神殿（こうどの）の祭台へとぐろを巻いた状態で安置され、「綱貫」まではそこに鎮座する。

市山の場合、御神木は神楽が舞われる神社（飯尾山八幡宮）のすぐ裏にあるが、聖地より離れてる神社や民家（最近は民家で行われる事はほとんど無いが）で行われる場合は賑やだ。

神職２～３人、奏楽人、氏子総代、奉供要員など数十人をして、お神酒などを持参、街道を清めながら、提灯で明し、笛太鼓で囃し、龍蛇を担ぎ、舞殿へお迎えをする。（邑智郡　大元神楽　p35）



写真（大元神楽伝承保存会ホームページ：http://www.omoto-kagura.com/ より）

神がかりになる候補者は「託太夫」とよばれ事前に選ばれ1週間精進潔斎し本番の日を迎える。（潔斎の詳細は59ページ参照）

古式の潔斎は厳しいものであるが近年ではそれは本人の自覚にまかされているようだ。

かつては託太夫と称する家柄もあったが現在の市山では団員が努めておりそれは会長である本山さんが選定しているそうだ。

誰が託太夫なのかは当日まで本人以外には明かされない。

各々の託太夫は当日に行われるクジによって順番を定められる。

この時の市山の場合は一番託太夫：湯浅泰男氏、二番託太夫：本山徳幸氏、三番託太夫：森野順氏（共に市山神友会）の三人であった。

（6）神楽の夜

筆者と春日研究員は平成18年11月18日に、市山飯尾山八幡宮にて市山神友会の大元神楽を拝見した。後日（2013年11月26日）、この研究の一環として同会代表の本山徳幸氏（65才）にインタビュー取材も行った。神がかりがおこる事を「託がつく」ともいうが本山氏はこの時、さらに前回にも託がついた方でもある。（当日の式次第は57ページ参照）

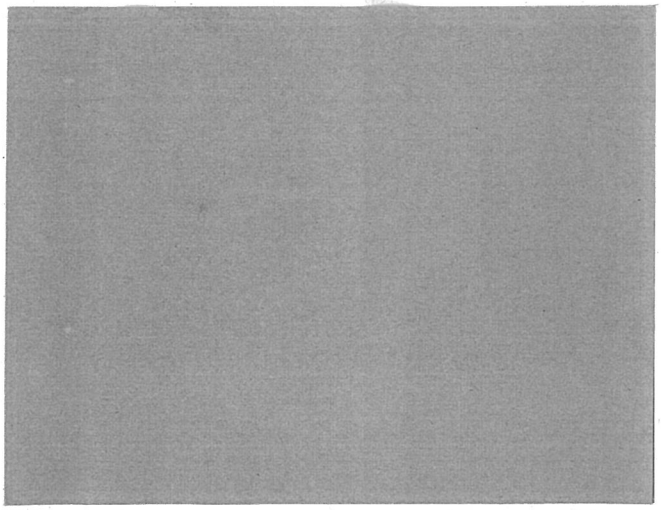
託太夫は上記のプログラムにより巧みに神がかりの状態に導かれて行き、中枢とも言える演目「綱貫」「六所舞」においてピークを迎えるように構成されている。この構成は何時頃から整備されていたのかは分らないが見事だ。

大元神楽は儀式舞、能舞と多種多様であるがここでは託舞の中枢演目を中心に記して行こうと思う。これらは夜も更け明け方になろうかという時に行われ神がかりがおこるのもこれらの演目であることが多い。

ちなみに神がかりは何時起るかは分らない、これらの前段の演目「天蓋」等で起る場合も多くその記録が残っている。

そしてそれは託太夫以外におこる場合もある。

○綱貫（つなぬき）



写真（大元神楽伝承保存会ホームページより）

別名「注連起し（しめおこし）」とも言われ、注連主を除いた全祭員が参加する。

神殿に安置されていた藁蛇（託綱）トグロがいよいよ解かれ八人の神官と六人の神楽人に操られて舞殿に現れる。

先頭に立つ神官（はなとり）の誘導で舞殿を反時計廻りに廻るのだが、尾の方を持つものは振り回されてしまう。託太夫も中に入り強く揉まれここで神懸かりがある場合もある。終わると、藁蛇は元山（東）を頭に、端山（西）を尾にして天蓋に宙づりにされる。

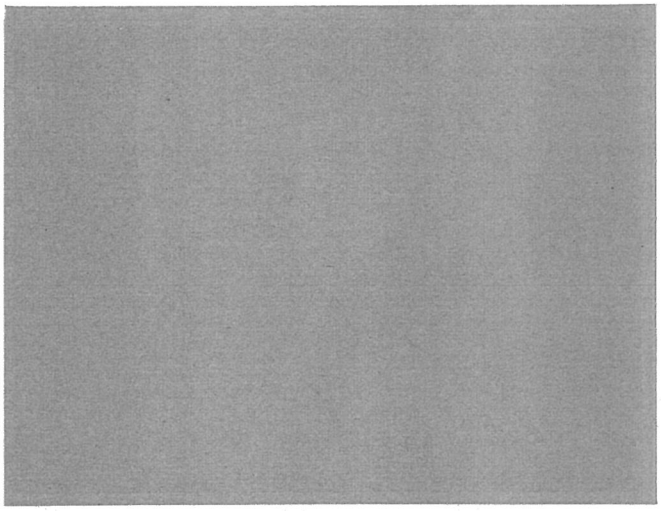
○五竜王

神がかりに付き添う重要な舞といわれで他の地域では王子舞とも言われる。

中国古来の国生み説話（盤古説話）を陰陽五行説で説く口上舞で天地の霊を鎮める鎮魂の儀礼を表す。

この演目の他にも陰陽五行は「天蓋」等多くの演目でそのテーマになっており、そのどれも重要なものとされる。ちなみに舞座のしつらえなどもすべて陰陽五行に法り配置されている。

○六所舞



写真（大元神楽伝承保存会ホームページより）

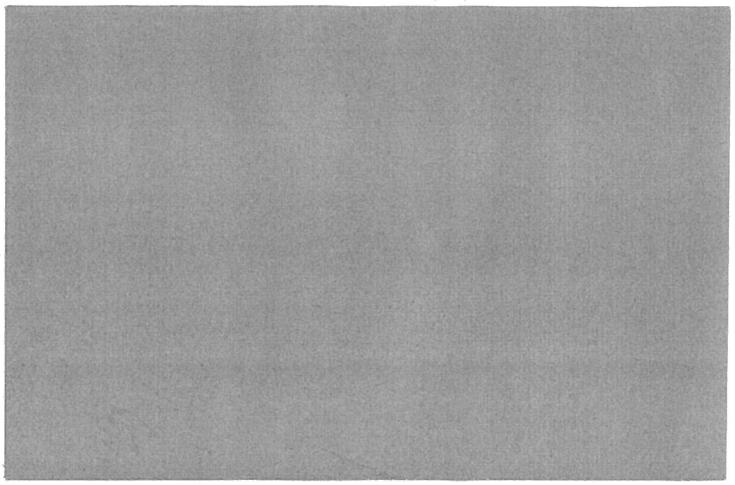
六所とは四方と天地のことで、この舞は諸方の神に祈り大元神楽の成就をさらに願う神事舞である。

大きな「一束幣」を持つ花取りを先頭に「みさき弊」という小さな御幣を持つ神官が、静かに舞殿を巡った後、六人の神楽人が、これも「みさき幣」を手に、託太夫を中程に入れ、託太夫の肩をみさき弊で奇声を上げながら激しく交互にこづき、また抱きかかえるような所作をし盛り上げる。後半になるにつれ神歌、楽奏も上がり廻り込みも早くなり託太夫を輪の中に入れ持ち上げる。これが一番託太夫から順番に繰り返される。全力を尽くして舞上げるものでこの中で、託太夫は身体の内外から激しい刺激を受け、満場の興奮の中で感極まり、ここで神懸かりが起こる事が多い。

神歌「♪～大元の神の行方は　左四つ　右九つに中は十六」

「♪～みさき山　下りつ上りつ　石ずりに　はかまが破れて 着替えたまわれ～」

一番託太夫の湯浅さんは意識は朦朧とし見るところ神がかる寸前といった様子であったが、なかなか託がつかない。伺候して二番託大夫の本山さんに交代したところで託はすぐさまについた。会場は騒然となる。



写真（大元神楽伝承保存会ホームページより）

神がかりがおきた場合、託太夫は託綱（稟蛇）に飛びかかり、さばりつこう（抱きつこう）とする。舞った後の跳躍は神がかりを表すとも言われるがまさにそれに符号する。

そして託太夫がこの託綱を越えた場合は死するといわれ、逆に尻餅をついた場合は神がかりが解けるといわれている。託綱はこの時あの世とこの世の結界を表す注連縄であろう。

「綱を飛び越えさすな！しっかり腰を抱け！尻餅をつかすな」大声が飛び交う。

その為神がかりが起ればすかさず「腰抱き」役が出て来て暴れる託太夫の腰を抱き固定させる。そして託綱を胸の高さまで降ろし託太夫を中央まで誘導しさばりつかせたままの状態にする。

すぐさま注連主等の散米行事（託太夫自身が撒く地もある）を施行する。

神歌「♪～参りては、神の社に、米を撒く　まく米ごとに　悪魔退く」

一束弊を奉持した神官（静間さん）が神がかりした託太夫（本山さん）と向かい合い大元神から託宣を聞く。

筆者の場所からは遠く託宣は聞きとりずらかった。

『神楽と神がかり』(牛尾三千夫　名著出版, 1985)には昭和54年の様子として次のように書かれている。

打米をして祭場を祓い清めて、一束弊を託太夫の頭上にかざして

「恐る恐る大元様にお伺い申し上げます。今宵の神楽はいかが思し召しでしょうか」

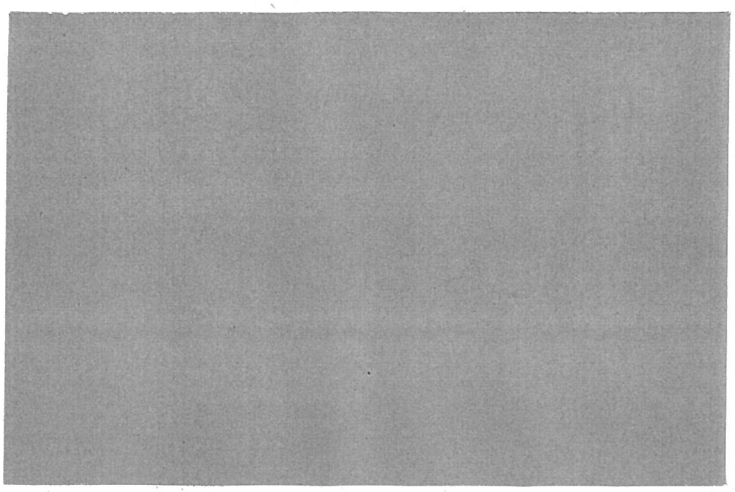
「ホオーオ、エエ　オオ、オホ、オオ　ホントニ、、、」

との託宣があった。以下、年の豊凶、火難水難、その他をお伺いして終った。（この時の神がかりは湯浅政一さんに起った）

託宣が終ると、「元山におかえりください」と申し上げ、注連主の打拂い（うちはらい）の秘法によって神返しを行う。

神がかりが解けた託太夫（本山さん）は皆に別室に運ばれ休みをとられた。

○御綱祭



写真（大元神楽伝承保存会ホームページより）

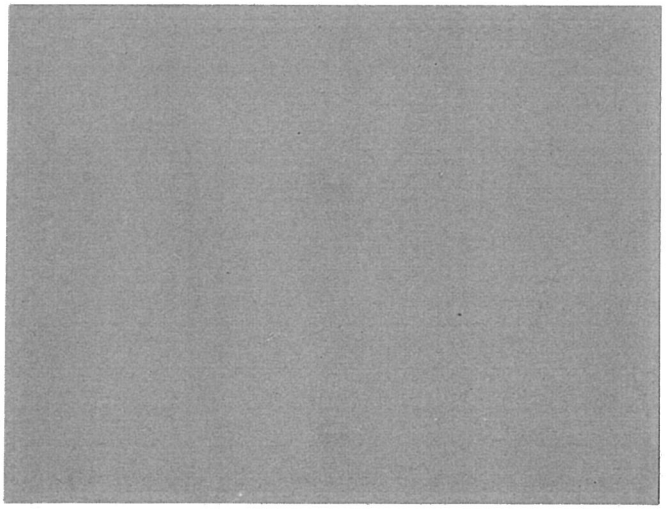
天蓋に吊り上げられていた藁蛇が少し下げられ、神官全員が手をかけて大きく揺すりながら神歌をうたう。

里内の神々の名を読み上げ後呼応するように

「♪～今年のこの月　この日のこの時　神楽の斎庭（ゆにわ）で神遊びしよう」

と歌い上げる。大合唱であり、まさに神人響宴の趣だ。

○神送り



写真（大元神楽伝承保存会ホームページより）

託綱に一束弊を挿したて　再び舞殿から神社裏の御神木（シイの木）へ送りかえし、鎮められた。

(7) エピローグ、考察

後日インタビューにて神がかりの様子を本山さんに伺ったのではあるが、神がかりの事はまったく記憶に無く意識は飛んでいる状態のようでこれは前回の神がかりの時もまったく同じだそうだ。

岩田勝氏は「憑依の状態に入った巫者に司霊者が問いかけることによって、神霊の託語を語るが（中

略）その神霊の働きのさまを真似たり、自動書写したりして、あたかも交替人格か、二重人格のような振舞をするが、憑依のとかれたあとに、巫者がみずからの行為について記憶を残すことがない」とポゼッションの状態を一人で超越性を得るエクスターゼと比して説かれている。

（神楽新考　P356）

託太夫（憑依者）と共に注連主（司霊者）は非常に重要な存在だ。

筆者は本山さんが神がかった時、注連主の静間さんがおののき震え緊張する姿が鮮烈な印象として残っている。やはり注連主にも相当の心得と決意が必要なのであろう。本山さんがしきりに注連主はとても大事だ、最近は注連主をやれる神主さんが少なくなったといわれるのを思い出す。

かつてこれらの祭式を伝えたといわれる修験、法者もその多くは巫女を伴い（多くは夫婦の関係をもって）神がかせる法者ー神がかる巫女の関係を持ち呪術的祭祀を行っていたという。

神がかる巫女は女性であった、かなわない事ではあろうがその頃の託舞を見てみたい。何時しか神楽は女人禁制となっていったがそれはいつ頃からなのだろう。ちなみに筆者は未見なのだが同じく島根の隠岐神楽には巫女が神がかりになる事が明治始めの頃まであったそうで現在でもその形式は残されているそうだ。

本山さんは託が解かれ別室運ばれ目覚めた時は身体の節々が痛くとても動ける状態ではなくその為その後に行われた「神送り」には参加していない。

しかし意識ははっきりとしており大元神楽の見事な成就にとても充実した気持が溢れ実に清らかで清々しい朝を迎えたそうだ。

本山さんはとても朴訥な方で、私の小さな頃よく聞いた「神がかりが起るのは正直もんだ」という言葉通りの印象を受けた。

さらに市山神友会の代表でもあり、大元神楽の伝承にはとても強い責任感をもっておられる。

市山神友会による平成六年の本託の再現は本山さん、竹内幸夫先生はじめ社中の皆さん方の大変な労力により達成された。

それより今まで託太夫は団員が努めてきたが、神がかりになるという事はやはり大変な事であり、選ばれた人に何が起るかは分らないという不安は毎回あり「よう託太夫になってくれた」という団員への感謝の念はいつも持っておられる。

本山さん自身託太夫になったのは今まで三度であるが精進潔斎はもとより大元さんにお参りする時は何時も

「私に降りて来て下さい、私はどうなってもええですけ～」

と素直な気持ちでお祈りするのだという。

「山々には神様がそこかしこにおられ七年毎の大元神楽の大祭にそれをお迎えするのだ」この一心の気持ちを持って普段を過ごしている。

「せちがらい世の中じゃーあるが、ワシ一人でいるときなんかは、人の心は弱いもんだが、ちょっとでも人と接触して悪い事をせんように」

強い気持ちを持ちなるべく善行、境内の掃除や草取りや木を刈ったりをする事などを心がけているそうだ。

神がかりがおこるのは大元神楽の持つ呪術的な様式（舞、囃子或は構成）などもあるがこういう心が

けの面（神に対する畏敬の念）も非常に大きいと感じた。もちろんこの心がけ自体も含めての大元神楽なのではあるが。

本山さん以外の市山神友会の皆さんも大元神楽にとても強い気持ちを持っておられ、何とかして先人の残してきたすばらしい伝統を守り後世に伝えたいという思いが溢れている。

別紙資料にある村民一体の気持ちが無ければ本託は出来ないと言われるのを体現しているようだ。

付け加えるならばこの日、大元神楽では伝説の湯浅政一さん（何度も神がかりになった事がある方）が式年祭に是非参加したいと入院先から神社に駆けつけたところで容態が悪化し急逝された。その事はすぐに関係者に伝わり騒然としたが会場では政一さんが神がかりをさせてくれたのだとの話がそこかしこから聞かれた。

大元ではこういう伝説的な話が多くある。こうした数々のエピソードもまた村民一体の心証を強くしているようにも思えるのだ。

湯浅政一さんは平成六年の本託の再現の折も大変ご尽力され、その折、式の始まる前に本山さんの肩を力強くバーンと叩かれたそうだ。

本山さんはこの時、大元神楽の後をまかされた気持ちをヒシヒシと感じたと言う。こういう先人の思いが大元神楽の伝承を支えている。

この後、最も近くに行われた大元神楽は平成24年（2012）であったが神がかりは起らなかったようだ。

またこの神楽を最後に大元神楽の理論的支柱でいらした竹内幸夫先生が式の終わりを待つようにして亡くなられた。

私も数少ない機会ではあったが先生からはご教授をいただき、著作からは多くの事を学んだ。感謝の念に堪えない。

本託が行われる大元神楽は数少なくなった、私が小学4年の時に初めて見て衝撃を受けた山ノ内の託舞も絶えたようだ。

山ノ内は本託が絶える事無く行われてきた唯一の土地でもあったそうだ、残念である。

石見地方は過疎も進み、神楽の源でもある農業（稲作）も規模縮小の一途を辿っている。

生活習慣の変節により神楽の持つ意味も少しずつ変遷しているようにも思えるが、市山神友会のように古くからの伝統を守ろうとする社中も少なからずある。

大元神楽、市山神友会の健やかな存続と更なる発展を願うばかりである。

参考資料

・神楽と神がかり：牛尾三千夫　名著出版（1985）
・私の神楽談義Ⅰ「大元神楽」(1995), Ⅱ「石見神楽」(1997) Ⅲ「神楽前線」(2001)：竹内幸夫　柏村印刷株式会社
・日本の美を舞う「石見神楽」：八富厳夫　石見神楽高津社中　岡田印刷株式会社（2000）
・校定石見神楽台本　柏村印刷株式会社（昭和29年）

・邑智郡　大元神楽：　邑智郡大元神楽保存会／編集（1982）
・神楽源流考：岩田勝　名著出版（1983）
・神楽新考：岩田勝　名著出版（1992）
・比婆荒神の中世的像容　ー「龍押し」の問答劇をめぐって　山本ひろ子　別冊太陽「祭礼ー神と人との饗宴」2006年1月1日発行より
・民俗写真集　フォークロアの目1　神がかり：萩原秀三郎　図書刊行会　（1997）
・農耕文化の民俗学的研究　白石昭臣（1992）岩田書院
・大元神楽伝承保存会ホームページ：http://www.omoto-kagura.com/
・大元神楽伝承　「神楽の里」（市山神友会）ホームページ
http://kaguranosato.rainy.jp/kaguranosato/

## 本山徳幸氏　インタビュー 骨子

市山神友会　会長　インタビュー当時（2013年）65才

〇略歴

生まれ育ちはここ地元である。

父が神職（牛尾三千夫宮司）さんに付き添って祭り（神楽）の手伝い、衣裳整備などをし、母も当家の手伝いをしていて子供の頃から神楽は常に身直にあった。

牛尾家はこのあたりの神職の家系で三千夫さん宅とは家も近く近所付き合いをしてた。

備考：牛尾三千夫氏は市山八幡宮他近隣の神社の神職を努め大元神楽の伝承に多大な貢献をされた。また民俗学者でもあり「神楽と神がかり」等重要な著作も多数発表され柳田國男賞も受賞されている。

若い頃は建築職人として10年ほど大阪へ出て働いていた、その後帰省し神楽の団体「市山舞子連中」に入団、そして消防団にも入った。

その頃は若い者も多く、神楽団員の入れ替わりも激しかったが自分は地道に神楽に打ち込み平成になる頃にはもう役員だった。

次第に会長になってみようという気になり自然の流れで会長になった。

昭和の終る頃団体の名称も「市山舞子連中」から「市山神友会」に変更された。

〇大元神楽について

大元神楽はどこまで遡れるかは分らない。

明治以前は神職自体が神楽をやっていたが明治初期に出された「神職演舞禁止令」により神職が神楽をする事は禁止された。

しかし昭和になっても始めの頃は「天蓋」曳きや「御座舞」などは神職もやっていたようだ。同時期「神がかり、託舞」も禁止されたが山奥の地域では密かに続けられていた。

演目「貴船」も主題が呪いであるため、陰惨だということで舞うこと相成らずの御触れが出た。昔はこの演目を舞っているときに具合が悪くなったりしたなどという話も聞いた。この演目は気合いを入れてやらなければならない。

この演目は長らく廃れていたが私達が復元した。復元には牛尾家に残っていた古いお面や口上をなどを参考にした。「貴船」の神歌は独特の味がある。

この演目はほぼ大元（式年祭）の時にのみ行っている。

毎年行われる秋祭りは豊年豊作を祈念するもので正式には大元神楽とは呼ばない。

式年祭で行うものを大元神楽と呼び、神がかり・託宣があるものを「本託（ほんたく）」形式だけのものを「柴託（しばたく）」と言う。

昔は他方面で本託をやっていたが今は大変少なくなってきている。

式年祭は3年、4年、6年に一度のところがある。

式年祭の時は特別で「今年は神楽年、大元さんだ」などと言い気合いが入る。

通年の神社費に加え式年祭の時はさらにもう一度負担金を集める。

式年祭の大元神楽は神事の部分などは神職さんが取り仕切り神楽団と一緒に行う。

神職は7人が必要で神楽団と合わせ人数も多く演目も神事含め34～5に及び一昼夜をかけて行い大掛かりなものだ。

市山神友会では本託は廃れしばらく行われていなかったが平成6年に皆で復元をし今まで続いている。（後述）

○託太夫について

託太夫は禊・潔斎もあり、伝統そして常識の範囲（新婚さんは選ばない等）で選ぶ。

潔斎は、女性との関係を断つ、自宅の神様の居られる部屋（神棚のある部屋）で寝る、朝晩のお祈りをする等、古老から聞き勉強した厳しい禁忌はあるが今は本人の心がけにまかせている。食事の種類、禁酒は無い。

市山神友会の場合、会長の本山氏が一月前に3人選定するがそれが誰かは（当人3人以外）伏せておく。

そして当日本番の直前（午後4時頃）に神社（市山飯尾山八幡宮）にて総代長に順番のクジを用意してもらい、神職、総代長の立ち会いの元、クジを引き3人の順番を決めそれぞれ一番託太夫、二番託太夫、三番託太夫とする。

選ばれた託大夫は「六所舞」の時、選ばれた順に中の方へ位置し、廻りの皆で神がかりに導かれて行く。神がかりが起らなかった場合は二番、三番と入れ替わる。

平成18年の式年祭では

一番託太夫：湯浅泰男氏　二番託太夫：本山徳幸氏　三番託太夫：森野順氏

であった。

この3人は託太夫であっても普段通り通常の舞もやる。

○平成18年の本託

この年の本託では一番託太夫の湯浅泰男氏は懸かる寸前に見えたが，それは起らなかった、その後二番託太夫：本山徳幸氏に入れ替わるとほどなく神がかりは起った。

筆者が「湯浅さんはほぼ懸かっていたようにも見えたのですが」と聞くと。

「あれは懸かっていない、見ればすぐ分る」と言う。

神がかりになる時は（神がかりがよく起る）「六所舞」の前段、神職と共に行う「綱貫」の時からも

う感覚が違う。

普通の感覚（状態）だと蛇行する藁蛇に振り回され綱にサバって（抱きついて）はいられずにマクれて（こけて）しまう「御綱祭」の時などもふっ飛ばされてしまう感じだ。

相当気持ちが入り込んで力を出しサバリついている（抱きつく）状態だ、足など飛んでいるような感覚になる。

「綱貫」は神職さんが司る大切なものだが藁蛇の蛇行の仕方はとても難しい。神職さんもやはり気合いが必要だと思う。当日神職さんが歌う神歌「みさき山」は相当気合いが入っていた。

神がかりになった託太夫の託綱にサバリつく力はとても強く飛び上がり託綱を越えようとする。託綱を飛び越えると死ぬと言われている。

神職がそれを押さえるのだがそれは相当の力が必要だ、託太夫の腰を押さえる「腰抱きの役」というのも事前に決めてある。

神懸かりは託太夫だけに起るとは限らず氏子に起る場合もある。過去何度かあった。

神懸かりが起るか起きないかはやってみなければわからない。

私等はそこにもってゆくまで6年の歳月をかけ皆で一心に準備、努力をしてゆく事に専念している。

神がかりの状態の事はよく皆さんから聞かれるのだがその時の事はまったく覚えていず上手く言うことが出来ない。これは前回のときもまったく同じだ。

神がかりの後、意識は明け方には戻っていた。体は節々が痛くとても動ける状態ではなく横になり休んでいて「神送り」には参加していない。しかし意識はしっかりとしており大元神楽の成就に充実した気持ちに溢れ「神送り」の後は朝日と共に実にすがすがしい朝を迎えた。

私はこの大祭の仕切役でもあり大元を滞りなく行う事が常に気になっていた。

神楽団、神職さん含め皆が一心になって大元を成功させようという気持ちがヒシヒシと伝わってきたのを覚えている。特に平成6年の復元（後述）の時はそうだった。

私（本山）の場合、色々と本託（式年祭）の準備をする中で「（神様）私にどうぞ来て下さい」と素直な気持ちでお願いする。

平成6年の時よりその気持ちは同じで変わらない。

「せちがらい世の中ではあるが自分一人でいるときなどは、人の心は弱いものだがちょっとでも人と接触して悪い事をせんように」

このように強い気持ちをもってなるべく善行、境内の掃除や草取りや木を刈ったりをする事などを心がけている。

備考；この年、教えを受けた湯浅政一さん（後述）は体を悪くされ済生会江津総合病院に入院されていた。

「今日は大元だ、是非行きたい、旧知の、神楽の仲間、神職にも会いたい」

氏の大元神楽への思いはとても強く、病院より特別に外出の許可をもらい、息子さんの車で神社へ向かった。

ところが車を降り神社の坂を上る途中、息が苦しくなり、急遽救急車で（済生会）病院へ戻ったが1時間後亡くなられた。政一さんの逝去の報は付き添っていた息子さんによって直ちに皆に伝わった。

ちなみに息子さんも市山神友会の舞子（メンバー）である。

息子さんの舞う演目なども急遽他のメンバーで代役した。

会場では湯浅政一さんの深い大元への思いが神懸かりを起こしたのではという話が会場のそこかしこで起った。

○平成６年　市山神友会、本託（託舞）の復元

平成６年の本託の復元は本山氏が発案し竹内幸夫先生など神友会のメンバーに相談し始まった。

隣の江尾（エノウ）地区では本託がまだ残っていたが市山では廃れており久しく行う事が出来ず悔しい思いがあった。

託太夫の選定などの祭式、不完全な演目、廃れていたものが多く復元は困難を極めた。近隣の村、古老などに聞き、また牛尾三千夫先生の著作など一から勉強し直し再現に努めた。

衣裳もボロボロであったがまずは廃れていた演目の整備に取りかかった。

特に大元神楽には必須の演目「剣舞」「四剣」「手草（タグサ）」や「山の大王」の再現に向け皆で努力を尽くした。

「剣舞」「手草」などは竹内先生が中心となって粘り強く何度も検証練習し復元した。

「四剣」は既に市山では廃れていたが小田（地区）に残っており習いに行き復元した。

これらの演目は台本があったが台本がなく苦労したのは「五龍王」だ 。

「五龍王」は本託の際、絞めに舞われる大事な演目で台詞の長い口上舞である。

市山地区は自分達を含め３つの神楽団体があるがまず他の２団体「今田（舞子連中）」「江尾（エノウ）」（共に４～50戸位）にヒントを探しに行った。

江尾はまだ本託をやっていて且つて「五龍王」も演じていたらしいと言う噂を聞き調べたのだが、すでに廃れており不明だった。

そこでさらに山奥の日貫（ヒヌイ）の５地区、５社中、山ノ内、春日、福原、吉原、桜井（どれも戸数３～40軒くらい）へ調査しに行った。

そこには「五龍王」を始めとして「剣舞」「四剣」などの演目が牛尾三千男宮司の口上と共に昔ながらの良い雰囲気で残っていた。

さっそく市山神友会のメンバー10人位で吉原、福原の手を習いに行き復元に努めた。

そして本託でさらに重要な事は「神がかり・託宣」の祭式で演目では「六所舞」「綱貫」「御綱祭」などであるがこれも皆で一つずつ丁寧に古い儀式の作法などの復元に努めた。

この近辺で昔のそれを一番知っておられる神職は三浦（賢斉）さんであり、彼を中心に一から習った。

そして八戸（ヤト）出身の湯浅政一さんにも多くを学ばせていただいた。この方は神楽は舞わないけれど何度も神がかりになった方でもあり、大元舞には大変詳しい。

備考：伝説の「湯浅政一」さん

（大正６年11月11日生まれ、八戸出身、その後市山へ転居。）

何度も神がかりになった方でありこの地域では有名な方。氏の神がかりの様子は写真集「神がかり；萩原秀三郎　図書刊行会（1977）」「神楽と神がかり：牛尾三千夫　名著出版（1985）」などにも多く紹介されている。

また平成12年の市山での本託の時にも氏に神がかりが起った。

神が懸かるという事は大変な事であり託太夫になるという事は軽い気持ちでは出来ない。ましてやこの時は復元による初めての経験である。

託大夫の選定に際し本山さんはその一人にまず自分自身が成る事にしその他の託太夫候補者を説得した。

本山さん自身、今まで託太夫に3度なっているが大元さんにお参りする時は

「私が言い出しっぺです、私はどうなってもええですけー、私に来て下さい」

と祈るそうである。

本番の始まる前、教えを請うた湯浅政一さんから託太夫3人の肩をバン！と叩かれ気合いを入れられた、代替わりを促されたような気がした。

神職の静間さんも本託を行うのは久しぶりだった。

一同で一生懸命大元舞の復元に努めたが神がかりが本当に起るはどうかは分らなかった。

しかし神がかりは本山さん本人に起きた。神職で注連主の静間さんも相当慌てた。

神懸かった時はただちに斎壇を用意し、饌米の準備をし、託宣を聞くなどせねばならない、皆バタバタだった。

本山さん46才の頃の話だ。大変な事だったけれどメンバーも若くよくがんばった。

この頃のメンバーは今でも大きくは変わっていないが死んだ方もいて寂しい思いだ。

○その後

邑智郡内では今現在本託をやっているところは本当に少なくなった。神がかりが起るのは本当にまれな事だ。

一心で復元はしたが今思えば本託がここまで続くとは思っていなかった。

この間色々苦労があったが市山神友会の皆はよくついて来てくれた。

平成6年より本託は今まで4回を数える。神懸かりがおきた人はそれぞれ

平成6年　本山徳幸さん

平成12年　湯浅政一さん

平成18年　本山徳幸さん

平成24年　無し

である。

26年間やってきて多くの思い出がある。

神社も今のような立派なものでは無く、衣裳もボロボロだったが皆で少しづつ整備して来た。試行錯誤の連続だった。

復元に共に尽力された竹内幸夫先生は平成25年1月30日に亡くなられた。

氏は地元桜江町出身で大元神楽研究の第一人者、著作も多く有り理論的な指導者であった。(元　川本高校数学教諭　吹奏楽部なども指導)

本山さんは折にふれ竹内先生に様々な相談をしていた。

平成24年11月の始めに（式年祭は11月17日）にはもうかなり弱っておられ

「は～ワシはもう大元はやれん（参加出来ない）だめだ」と言われた。

この状態では太鼓演奏は無理だとは思われていたがその後(1週間ほどすると)少し体調が戻ってきた。

お孫さんの車で一演目づつ送り迎えをしてもらい何とか練習を行っていた。

結局、式年祭で竹内先生は3演目の大太鼓を叩いた、「蛭子（エビス）」「貴船」「六所舞」どれも重要な演目だ。

この時の本託では息子さん（竹内修二さん、市山神友会所属）が託太夫になることを自から申し出ていたが父には伝えてくれるなと言っていた。（託太夫になることは本当に大変な事だ）先生には当日間際に知らせたのだと思う。

この本託では神懸かりは起らなかったものの本託方式は無事遂行できた。

私（本山）はその結果というよりも「今のこの時代に今の世代の神楽団がこの本託をどれだけ一心になってやれるか」と言う事がより大事であるのだと思っている。

竹内先生は年を明け亡くなられた。相談をする相手がいなくなり寂しい思いだ。

高齢でも舞える演目がある、竹内先生は77才までは舞えとワシ（本山）に言った。

私が今一番思うのは昔から伝わっているもの（大元神楽）を大事に守って行く事が第一であってその中で6年毎の式年祭「大元舞」を特別大事にするということだ。

最近は民俗学者の皆さんや大学生などが興味を持ってくれ、遠方から来ていただくこともある、賛同者が増えてくれるのはうれしい限りだ。

過疎で若い人も少なく高齢化が進んでいるのだが、ここをがんばり今後は近隣の団体（本郷社中など）と活発に交流し皆で助け合って行ければというのが私の願いだ。

○藁蛇（ワラヘビ）

藁蛇は御神体では無いのだが御神木から藁蛇に神様が降りて来る、神の依代だと思う。

藁蛇はその年の新穀で総代と共に氏子や私達社中の皆（13人くらい）で1日で作る。

藁蛇は頭の部分を作るのが難しい、頭の部分は別に作り後で胴と合体させる。

今一番廃れているのが、元山（モトヤマ）と端山（ハヤマ）の柱に備えくくり着ける俵だ。最近は俵自体使う人もいなくなり作る人も少なくなった。

藁蛇だけではなく一束弊、みさき弊そして毎年6月30日にやる大祓祭りなど使う茅の輪などもすべて自分達で作る。

藁蛇は作って神社へ置いておき。当日の朝大元の御神木から道行きで廻り神社の祭台にとぐろを巻く形で供える。

○衣裳・面・舞

市山の面は「柿田面工房」衣裳は「細川神楽衣裳店」（共に浜田市）で作ってもらっている。

衣裳は昔のようになるべく刺繍を少なく地肌を見せるようにと注文は出すが、最近は派手になって来ていて好ましくない思いだ。面も昔の色を参考にしてもらうよう注文をしている。

「八蛇」で使う　蛇胴は「桑の木園」（浜田市）で作ってもらっている。これも昔はもっとシンプルだった。

舞う際は大太鼓のリズムに乗せられ舞も高揚する。

大元の舞の特徴は土臭く重心を低く舞うところだ。鬼舞などは特にそうである。

この所作は農作業から来ていると思う、竹内先生もよく言っておられた。

最近の若者は農作業をしないのでなかなか膝を落とす所作は難しそうだ。

## 大元神楽、市山神友会　式次第

平成 18 年 11 月 18 日 市山飯尾山八幡宮（島根県江津市桜江町市山 474）にて

・神迎え　　大元神の御神木まで行き、神を稟蛇にお迎えし、舞殿までお連れする儀式。神殿へとぐろを巻いた状態で安置する。

○第一幕

・四方拝　　神迎えの儀式舞。
・清湯立　　神事。
・荒神祭　　神事。
・潮祓　　弊舞い、儀式舞。
・山勧請　　注連主の大役。大元神を元山の俵へ、諸神を端山をの俵へ招く儀式。
・神殿入　　神官入場の儀式。
・献饌　　神饌をお供えする儀式、豪華である。
・奉弊　　二人の神官が神前に弊をふる儀式。
・大祓連読　　神官総勢による祝詞の言上。
・祝詞奉上　　注連主による祝詞の奉上。
・玉串奉奠　　氏子総代をはじめ、参詣者一同神楽の成就を願う。

○第二幕

・太鼓口　　神楽中で唯一奏楽だけで演ずる演目。大元神楽のすべての舞囃子が入っているとも云われる。
・磐戸　　神楽の起源話といわれる「天の岩戸」を題材にした能舞。
・弓八幡　　八幡神が、異国から攻めてきた鬼を退治する能舞。
・剣舞　　笠に見立てた採物をもち舞う、笠は昔呪具であった。剣は使われない。
・神武　　神武天皇の東征伝説を題材にした能舞。
・御座（ござ）　御座は神の座であり、半畳のござを捧げ五方を固める。修験色が残る儀式舞。
・天蓋（てんがい）舞殿に吊られた九つの天蓋が三人の曳き手により巧みに操られる、神事舞。
一名「降居」とも呼ばれ重要な演目で、陰陽五行の神、九つの天蓋が揺れ動く様は神が遊んでいる姿と見なされる。
かつてはこの天蓋の下で舞ったとも伝えられ今でも神がかりが　よく起る演目である。

○第三幕

・羯鼓刹面（かっこきりめ）
「羯鼓」の滑稽な舞と「切目王子」と「天女」の優雅な二人舞「切目王子」の重厚な一人舞という構成の能舞。修験の色が残る。
・手草（たぐさ）次の「山の大王」という神を迎えるための神勧請の儀式舞。
・山の大王　　山からの来訪神を里人がもてなすという能舞。こっけいなやりとりが楽しい。
・鐘馗（しょうき）「素戔嗚尊」が「大疫神悪魔王」を退治する物語の能舞、鬼舞。
・貴船　　夫に離縁された女が呪いをかけ鬼女となる能舞、物語舞。

・天神　　菅原道真公を題材にした能舞
・恵比寿　　「えびす」さんの御神徳を寿ぐ能舞
・四剣　　刀と鈴を持ち、東西南北の災禍を払うとされている儀式舞

○第四幕　神がかりと託宣

・綱貫

別名「注連起こし」とも言われる。

神殿に安置されていた藁蛇（託綱）のトグロが解かれ八人の神官と六人の神楽人に操られて舞殿に現れる。

先頭に立つ神官の誘導で舞殿を反時計廻りに廻るのだが、託太夫も中に入り強く揉まれる。ここで神懸かりがある場合もある。

終わると、藁蛇は頭を元山（東）に、尾を端山（西）にして天蓋に宙づりにされる。

・五龍王

青龍、赤龍、白龍、黒龍の四人の兄弟王子と末子黄龍王子の所領争いを、文選博士（もんぜんはかせ）が収めるという物語の能舞。

・六所舞

六所とは四方と天地のことで、この舞は諸方の神に祈り大元神楽の成就をさらに願う神事舞。

全力を尽くして舞上げるもので神懸かりが起こる事が多い。この時は二番託太夫「本山徳幸」さんに託がついた。

・御綱祭（みつなまつり）

天蓋に吊り上げられていた藁蛇が少し下げられ、神官全員が手をかけて大きく揺すりながら神歌をうたう。

・成就神楽（じょうじゅかぐら）

夜が明けるころ、全神職が舞殿の元山の前に座り、大元神さまや他の神さまに感謝の礼をして、神楽を終える。

○その後

・黒塚

黒塚「那須野が原」を通る旅人を騙しては殺してしまう狐の妖怪が主役の能舞。

・塵輪（じんりん）

足仲津彦命（たらしなかつひこのみこと）が、異国から攻めてきた塵輪魔王という鬼を退治するという能舞。

・神送り

託綱に一束弊を挿したて　再び舞殿から御神木へ送りかえし、鎮めらる。

参考文献

大元神楽伝承保存会　ホームページ　http://www.omoto-kagura.com/
神楽と神がかり：牛尾三千夫　名著出版（1985）
私の神楽談義：竹内幸夫　柏村印刷

## 大元神楽　儀礼の手控え

『神楽と神がかり』 牛尾三千夫　名著出版，1985　P43より　抜粋

邑智郡長谷村大字八戸（ヤト）と山ノ内は明治の託宣神事の以降も途切れなく託舞を行って来た。唯一の地である。

山ノ内伝承者藤本房一氏の手控を列記する。

○託太夫選定の方法

1. 託太夫候補者は各人の希望により定め大体十人までとす。
2. 候補者十名までの籤（クジ）を作り本籤を引く順番を定む。
3. 託太夫は三名にして一、二、三番と順位を定め置く。
4. 託綱及御綱祭に奉仕するものは大体託太夫候補者十名にて行ふ。
5. 託太夫候補者は自ら希望するも家人の反対あれば絶対出来ないこと。
6. 犬年生まれのものは託太夫になる事を得ず。

○潔斎

1. 託太夫に選定されたるものは祭日前七日間潔斎すること。
2. 毎朝早朝水垢離し大元さんへ参詣する事。
3. 火の忌を厳にし死火産火近づかず、万一家に死産ありたる時は直ちに託太夫の資格を失ふものなり。
4. 別火するを本意とすれど難しき時は別室にて家人より食事就寝を断つ事。
5. 四足を食はざる事。
6. 禁酒する事。
7. 他人より煙草の火をもらはぬ事。
8. 子女に近づかぬ事。
9. 村外に出かけぬ様心掛け荒仕事をせぬ事。
10. 其他すべて穢れより遠ざかり謹慎している事。

○綱貫の次第

1. 勧請弊捧持者　一名　礼服
2. 綱貫奉仕者　七名　白衣　袴
3. 腰抱　二名　白衣　袴
4. 以上四名にて謹行し綱貫はみさき山を歌ひ乍（ナガ）ら高殿に入り元山より端山を拝し順次五方を立てること。
5. 一束弊は常に龍頭につけ絶対に離さず舞ふこと。
6. 託縄を元山より端山に引渡す時は龍頭を少し上にに向け必ず左より巻く事。
7. 一束弊は龍頭に巻きつける事。

○御綱祭

1. 先づ一番託太夫を中に入れ七名のもの各々手に御崎弊を持って天蓋　の下にて楽に合わせてみさき山を歌い乍ら舞ふ、各人楽の急調子なるに及びすれ違ひ様に御崎弊を託太夫の肩に当てる事、

かくする程にいよいよ急調子に入り囃したてて託太夫を中にはさみ胴上げの如くせり立てること。

2. かくする事くり返す内託太夫は神懸かりするものなり、一番太夫神懸かりせざると木は二番太夫を一番太夫通り前期　　の作法を行ふ。

3. 神がかりしたる時は腰だき二人にて支え尻餅つかざるようにする事肝要なり。

4. 神明帳上ぐる者　　一名　礼服
御神託お伺ひする者　一名　礼服
この役選定に慎重を要す。

5. 託太夫神懸かりありたる時は直ちに五龍王を舞ふ。

6. 神がかりしたる時は直ちに託縄にさばらす事、又まき米にて払ふこと。

7. 神名帳を読上げること。

8. 御伺ひは作柄災難などの他はあまりいろいろな事をお伺ひしない事。

9. 御伺い言は前以て定めおく事肝要なり。

10. 託宣の行事終りても神懸かりとけざる時は七五三主神返しの咒法を行ふ事、七五三主行はざれば他の神主をして行はしむ。

11. 託宣者への礼として山ノ俵一俵及び金銭相当額を与へる事。

付記

神楽式に本託を行ふ場合は村民一心同体（肌が合ふと云う言葉が昔よりの通用語なり）である事先決なり。

わずかなりとも折悪しきことあらば絶対に託宣なき事古来よりの言伝えなり、

又高殿の敷物は一切新調の畳を用いる事、託宣終るまでは女子を一切高殿内に入れぬ事、

汚れを遠ざけて手足口中等清水にて良く洗ひおく事勿論なり。